

Centimetres

Kodak
LICENSED PRODUCT
Black

© The Tiffen Company, 2000

KODAK Color Control Patches

Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

Magenta

White

3/Color

繪本自來也說話

後編

三

3遠
1910
9

0

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

1

2

3

4

5

6

7

8

9

20

1

2

3

自來也 説話後編卷之二

武江 感和亭鬼武著

自來也 再到安房國併上総國百首邑大見屋茂八

家族入条



斯く自來也と大磯の曲輪めく身と録一先三浦の沖へ立寄り
まが此處おありし喜兼く吾川采男ありぬれうへはほりも浦
人の来人も面倒なり下より上総の國へ船と遭跟再び安房の
國子到らんと想ひはじまはあがし一侶吉郎ハ上総ふありたれ天
磯兵衛法師となり居られ庵室へ遣一予も跡よりその邊へ
趣くとあり小賊ども朝晝歌之助を延連ふり動靜は

自來也 説話後編卷之三

且つ小説話小嘍浪小加へむりんと歌之助俱く願ふれば自來也
 討笑の越後路より関及びこれ判那扈從の薄穂よか併も必
 定其判那を取進めしも倣しき奴らんが予が業ふく人の
 素姓と糾ふも及ばど落魂尽ととてんも一與小嘍浪の中へ受
 呉んこ流を容し勤りよとありは歌之助大こふ欣躍くり
 らく首領予と鷹賊と倣しき人へ今よりいほ藤間の床北のち
 お流し入りとより武勇も一騎當千とおぼされよ昨夜列位ふり
 卷且し期なあり某事とも存せど廣言と發ら敵の心瓜とり
 却りかんとせりかど謀計相違のより悪く持病の疝癢起し遂に
 手込不逢ひ半負不だんハとりはじこも強勇の列位一同お難
 と成りける上へ敵と小オオ弱みこづへ更お恐怖こことり大丈
 夫の某今よりハ首領の片腕とも憑こまると今お始りぬ痴漢の
 大言自來也苦笑しと打點何ぞは噂よりハ大痴漢鬱散の
 保養もなれざる者今日よりハ汝が勇氣を憑ひつんと酒
 汲る一衆皆笑ひと催しけは諸且其後自來也と安房の
 國おいくり鋸山といへる小權一身を躲しありけふか或時小城
 を集むるつとく上総國天羽郡百首邑お大見屋茂八といふ
 の酒問屋おと獵船も教多りち家富るりのと関あれをこの
 祈の鬱氣とくじ小那家お押入金銀と奪りんと其手筈を
 必定けは此大見屋茂八といふりの元由緒ある武士の果あが

夫の某今よりハ首領の片腕とも憑こまると今お始りぬ痴漢の
 大言自來也苦笑しと打點何ぞは噂よりハ大痴漢鬱散の
 保養もなれざる者今日よりハ汝が勇氣を憑ひつんと酒
 汲る一衆皆笑ひと催しけは諸且其後自來也と安房の
 國おいくり鋸山といへる小權一身を躲しありけふか或時小城
 を集むるつとく上総國天羽郡百首邑お大見屋茂八といふ
 の酒問屋おと獵船も教多りち家富るりのと関あれをこの
 祈の鬱氣とくじ小那家お押入金銀と奪りんと其手筈を
 必定けは此大見屋茂八といふりの元由緒ある武士の果あが

おらや
自来也
おんや
大見屋茂八が
家小換入圖



近來上総の百首あつて街人となり半泉家富渾家も許多暮
 しちれ處小一夜盜賊救多込入土庫とあし明金銀を奪ひ行
 時主人茂八目そと盗賊なれと知り素活氣の茂八なれ
 を枕邊より大腰劔を取ると追跑出せ二無三小賊三四個と
 切散せし這物音小渾家の者大我もくと得物惹提走出働く
 あぞ盜賊ともなりてあはし引色小入へけれ處小卒小大風吹起り
 鎧甲頭盛着しなれ吳殿のみの救百騎あつれも小太刀薙刀
 鍵ふと推へ茂八の家族小切くかれ不堪と右性尤往小逃
 ゆく小茂八一個勇なりとしくも詮とて那く公なぐも金子を捨
 おこ一同小惹退く跡あひ自來也印以結ひ口小呪文を唱われ
 忽風止と吳殿の物も消失われを公僻靜小取出せし金銀次
 小賊小脊負せ立歸らんとせれ折くら傍の畔はほりよう
 首領く早と捨行あつ俱小連行とぬれとと急御れあぞ
 誰中んと立寄つれは相妻歌之助泥田小落入り顔も足り
 泥小すあれく不起立ありけれゆる自來也も果と果とて
 意病かりれ奴うな必定良今の吳殿のその小恐怖腰を抜せし
 ひとんと啾啾くを歌之助中りく小起とらとらと首領の家
 のこく予今霄とまけけり手練のほどと備尊賢列位の後
 詩なりあれ處ふあひ掛がれ吳殿の武者の頭とてを歌
 泥ん力足踏あめん踏外一畔より泥田へ轉び落起るん

近來上総の百首あつて街人となり半泉家富渾家も許多暮
 しちれ處小一夜盜賊救多込入土庫とあし明金銀を奪ひ行
 時主人茂八目そと盗賊なれと知り素活氣の茂八なれ
 を枕邊より大腰劔を取ると追跑出せ二無三小賊三四個と
 切散せし這物音小渾家の者大我もくと得物惹提走出働く
 あぞ盜賊ともなりてあはし引色小入へけれ處小卒小大風吹起り
 鎧甲頭盛着しなれ吳殿のみの救百騎あつれも小太刀薙刀
 鍵ふと推へ茂八の家族小切くかれ不堪と右性尤往小逃
 ゆく小茂八一個勇なりとしくも詮とて那く公なぐも金子を捨
 おこ一同小惹退く跡あひ自來也印以結ひ口小呪文を唱われ
 忽風止と吳殿の物も消失われを公僻靜小取出せし金銀次
 小賊小脊負せ立歸らんとせれ折くら傍の畔はほりよう
 首領く早と捨行あつ俱小連行とぬれとと急御れあぞ
 誰中んと立寄つれは相妻歌之助泥田小落入り顔も足り
 泥小すあれく不起立ありけれゆる自來也も果と果とて
 意病かりれ奴うな必定良今の吳殿のその小恐怖腰を抜せし
 ひとんと啾啾くを歌之助中りく小起とらとらと首領の家
 のこく予今霄とまけけり手練のほどと備尊賢列位の後
 詩なりあれ處ふあひ掛がれ吳殿の武者の頭とてを歌
 泥ん力足踏あめん踏外一畔より泥田へ轉び落起るん

想ひしごとくや持病の疝癢あつり詮とぶあく首領と呼きて
こゝろふなりと大行流しと語らふぞ自來也つとく病のあ
世ごとく死の猛勇の若冠も勝どつたあや是非もかり且この人
ともみ味方危さ事あれは今宵のこゝろは異敷のりのみかたごと
種くの奇怪あつづうは心と疝癢起とすどと衆皆一同
絶倒しと歌之助り流ともみ鑊山へぞ延とりぬ

千歳屋代衣愛押併押亡身報恩条

茲ふ一つの奇な話ありけれと大磯の曲輪子歳屋代衣の
全盛日小増この頃の名取は提女となりされ平日押爪
愛と揚家小到るふも這と抱うとすも則をたけり

その代衣の愛せし押爪黒斑の男押あり錦繡を首に纏ひ
金鈴爪はけりおびちるは深く代衣小馴跟朝昏傍あり
大座より対お出とて圍お入るも夜着の衣筒ありしと神妙
なりとく代衣の愛猶好し一則へゆけるもその押跟
添ひとすより若とれ爪入れば対お泣叫びと喧しとるんご
一則の中やぐも連ゆくはふなりぬ此とて遂小曲輪をふせえ
る人く皆つと代衣の若お押の看りぬるも千歳の主人おま
関と代衣小押と愛をばせと固く制とふより代衣も人
の風説も懼しと遠ざれども此押只顧慕し離とぞかこら
られ人それと追退しと泣叫びと撃杖の下より代衣此

千歳屋
代々衣押
愛と周



松風亭



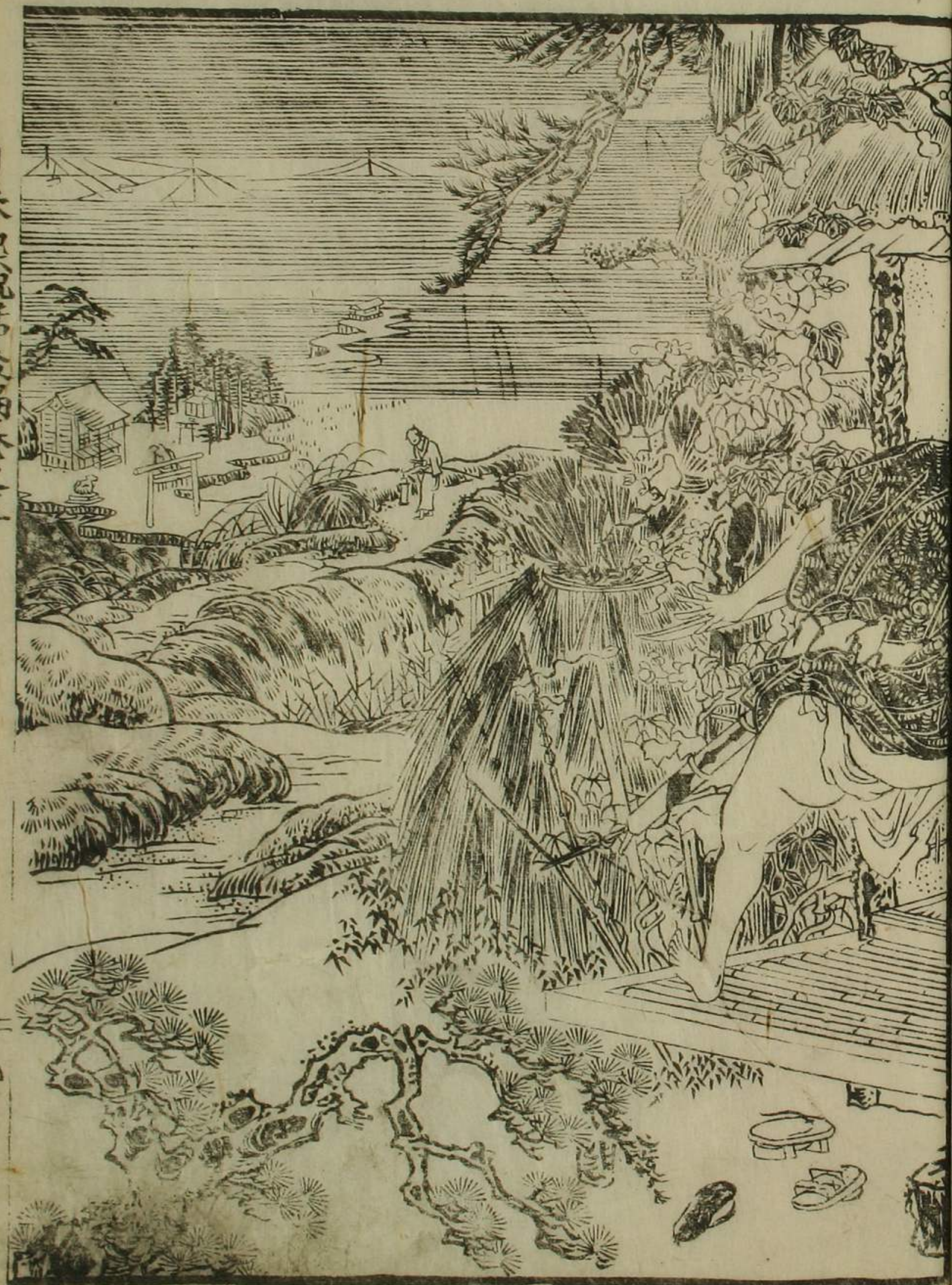
襦へより付とづれば今とふ歳の渾家も怪と疑ひて押成打
殺んと計て去れり代とてね 厠へ到りしと何方よりかの押
走ありて同く厠へ入りんとせしと傍の人庵丁を以てら
拂ひぬればその首を飛ぶ 厠の下に潜り 胴は残る戸を
あり代に衣大に驚と跳出るとば人くその首を捜ぶふ 厠の
下小大に蛇が食つて死に居り 衆皆手を拍り押の忠誠を
感ぜり是蛇の代に衣を觀看しと去りて罪に押を怪と
殺しぬればいと不便なりとて代とてね 深くかげこの餘り其
尸を寺院に葬りて塔を建て 如是畜生發菩提心とて
まはれり

緩嶋金吾逢難併 吾川采男救金吾条

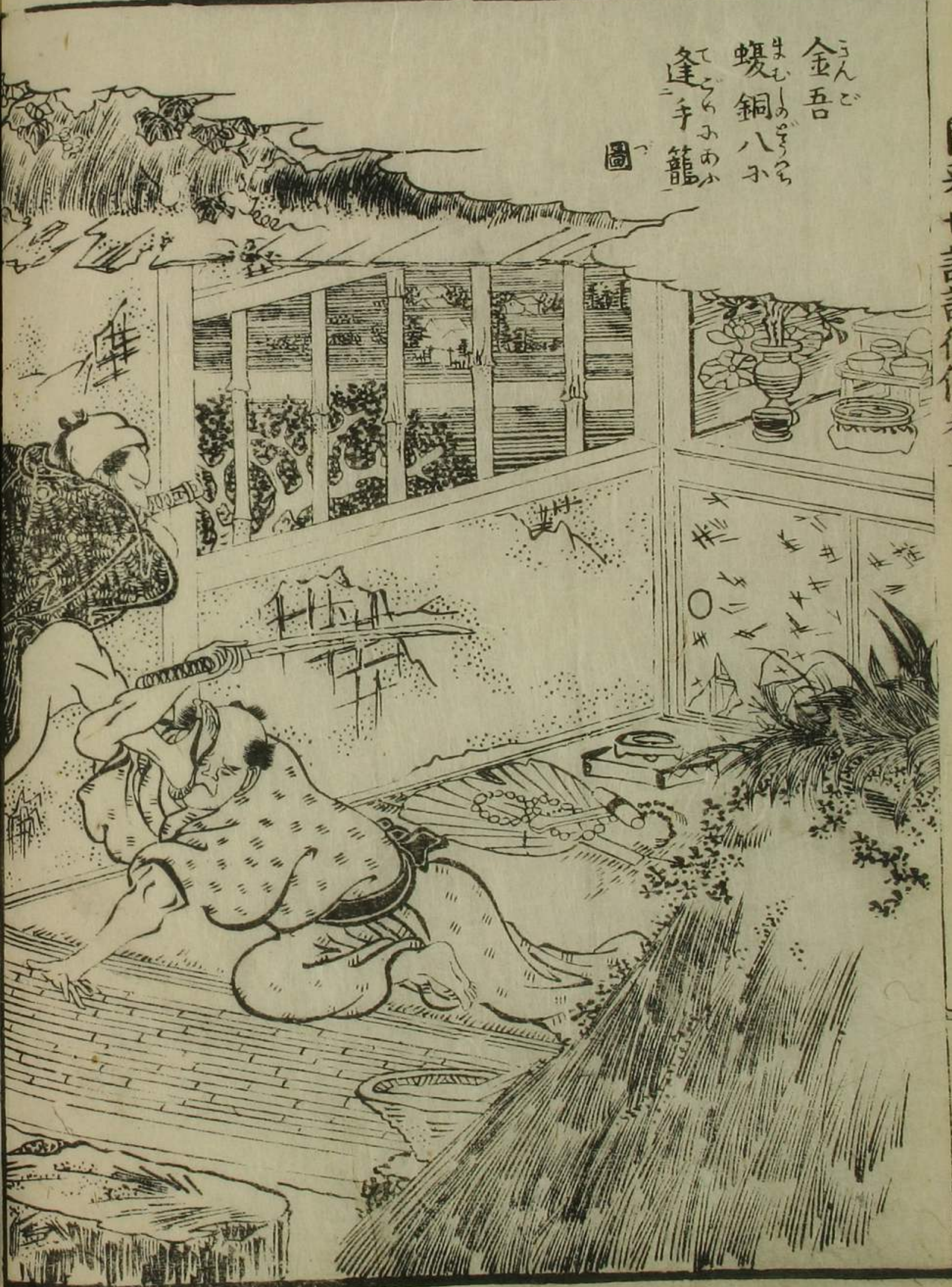
復爰に相列三浦みありけふ緩嶋金吾とて女兒の身代金成
りて 吾川采男の病も平愈做しぬればいと謝せん
采男とて大磯小到了庵一個家ありて 今日暮ふ及べども
采男帰て来たれば戸帯をかき燈を點し佛壇みむ
念佛唱へてありけふ處に那大磯のサ頼者 鑊の銅ハハ
傳兵衛の女兒を賣く 金子を奪んとせしと士ふ支へら
空しく 過行るれが亦との程金錢乏しぬれば
想ひぬし 何卒奪ひ取らんと此夜暗ふ此家の戶外
必定なり

内の動靜をうかがふ。小前後も人も那く内へ傳兵衛一人
 念佛の声のこぼれを折よと門に固辞明ら小入り一
 不亂小念珠繰居る傳兵衛を捕へ押へ声山とそつら一討と
 腰に刀抜放しつと。汝前小女兒を賣しれ分は渡
 割入士成憑予を憂目小達せ代て今宵こそ速
 金子を残らと渡せば祐け金ぶられさう。身躰曝子切吳
 んと白刃を閃くとあぞ傳兵衛も詮と人形悲へつと
 斯なれうハ予金銀成貯へ何うせん手元ああ人這あふ
 ぶれなれども其金と大切の主人のなめ小女兒の身を賣こ
 び高き薬品成求め主人の大病平愈うとせしめ人さむ

今一金も貯なし若りつりつと想ひつと家捜し疑ひ成
 暗く入と詫とでも不兼引汝言と巧く申と欺くと
 欲とくも予を誑て得んやよ一金うへな記あもせよ前小
 も不接憂目成とれ意恨あれば饒とせと利刀振あげ
 切跟成傳兵衛も身と用とてこれを避あり合ふ棒おつと
 會釋なつとやよ盜賊人殺し出合ひ多く叫ぶ夜中
 隣家も隔りたさう人もあつれば透間を窺ひ逃出入と
 身をあせれを道へ不遣と銅ハが打込白刃成抜つ潜り川
 働とほれども老人の力も労且遂小小庭の隅あ追詰と己
 小危さとりとそあへ吾川采男と大儀あく自來也と捕逃



金吾
 蝦銅八子
 逢手籠
 圖



残念なごころ詮さへなぐはさりや三浦へ立歸る折より侍兵衛
 が家の邊りあぐ遙ふ人の叫ぶ声幽小園はけ何更中入
 と路と走戸口ふ入る何者ともあつと侍兵衛小庭小あつ浩
 ろり伏んづ勢ひふ這者何とく同間も待と侍兵衛が盗賊よ
 と呼ふと園より踊り入り腰刀抜く切跟く銅八透さして下
 度請留二打三うち戦ふ所と持とれ棒あつ傳ま傍う足と拂
 へば螻の銅八尻居不勝ふを采男ハ得くりと蹴掛了肩先より
 大袈裟小乳の下まぐ唸唸新切れく銅八其口一氣小透
 追回る瓜起しも立と心窩一突七顛八倒田打狂ひ死する
 る公地よりこそ看へふされ侍兵衛ハ大小欣躍危る場所へ君

かくせあひ一故卒と命を拾ひ一と始終の動靜と説話の采男
 も僕小歎ひしう去まづら人と過一我あれ此家小ありそ事言
 か人たられ病後ゆゑ今すこ一保養做一筋骨健ふなるん
 みの諸國武者修行と号し捉進一さる盗賊自末也の行衛氏
 捜求擲捕夫を功み帰參を程がらん所存なれも夫まぐ此男
 を何所小置んとありられハ傳兵衛しつと侍兵衛も大破ふ
 あつと憑や救ふらんは那方へ清入あり兄なりと他ふあつせ
 曲輪の中子借宅あつと今半貞薬養然るべ一這こと原
 来女児ふおわくも変して鹿畧めはじとやあそ迎も親子の
 人れ世話小あづこれ此男は這より還し曲輪小到り代衣

も高義せん復銅八の死骸もらのゆふ置かてけま一人
あつと海へうつ込捨んはく肩小惹掛傳兵衛ふつうれて三浦
をたらら出さるれ

吾川采男到大磯曲輪併小廝得助討却而兩個

結縁条

うれば采男ハ之浦をぬぐ大磯小到り代衣小對面做一暗小
動静をそのめがうり身の上を憑とぬれば代衣と縁より誘ひ
主人長就一とぬ渾家へも兄なりと詐り曲輪の中小小家奴
補裡らふ住居做りせむと世帯一式代衣より箱ひさぐりぬ
且茲千歳屋の小廝小得助といふ漢子いつとなく代衣小

ぬぐく意慕し〜ありけれが全盛の代衣小廝の身もあぐも
公中言出せることも及ばざれば一個〜後といふ熟く安ホト
らひ不圖想ひ出〜守宮と酒小浸一人ふあ〜ぬれば勿ら
意慕の情發了その愚叶ふよ一兼〜及びは是の此計を行ん
と處くを捜未〜女男れ守宮とすふ入とこれを黒焼と〜折
を窺ひ〜一日代衣〜の大座へ神酒傳人吳とよとありけれ
僮侍ひと得助欣躍神酒陶の中へ暗く小那守宮とられ置後刻
這を下ん〜代衣ふふへ憐もその餘りを吞〜やと其計ひ
做〜おれ今日こそ我戀成就せめ〜内公欣悦ありし〜を我つる
此日采男と代衣の大座小到り福ひ奪りあ〜られ〜山下

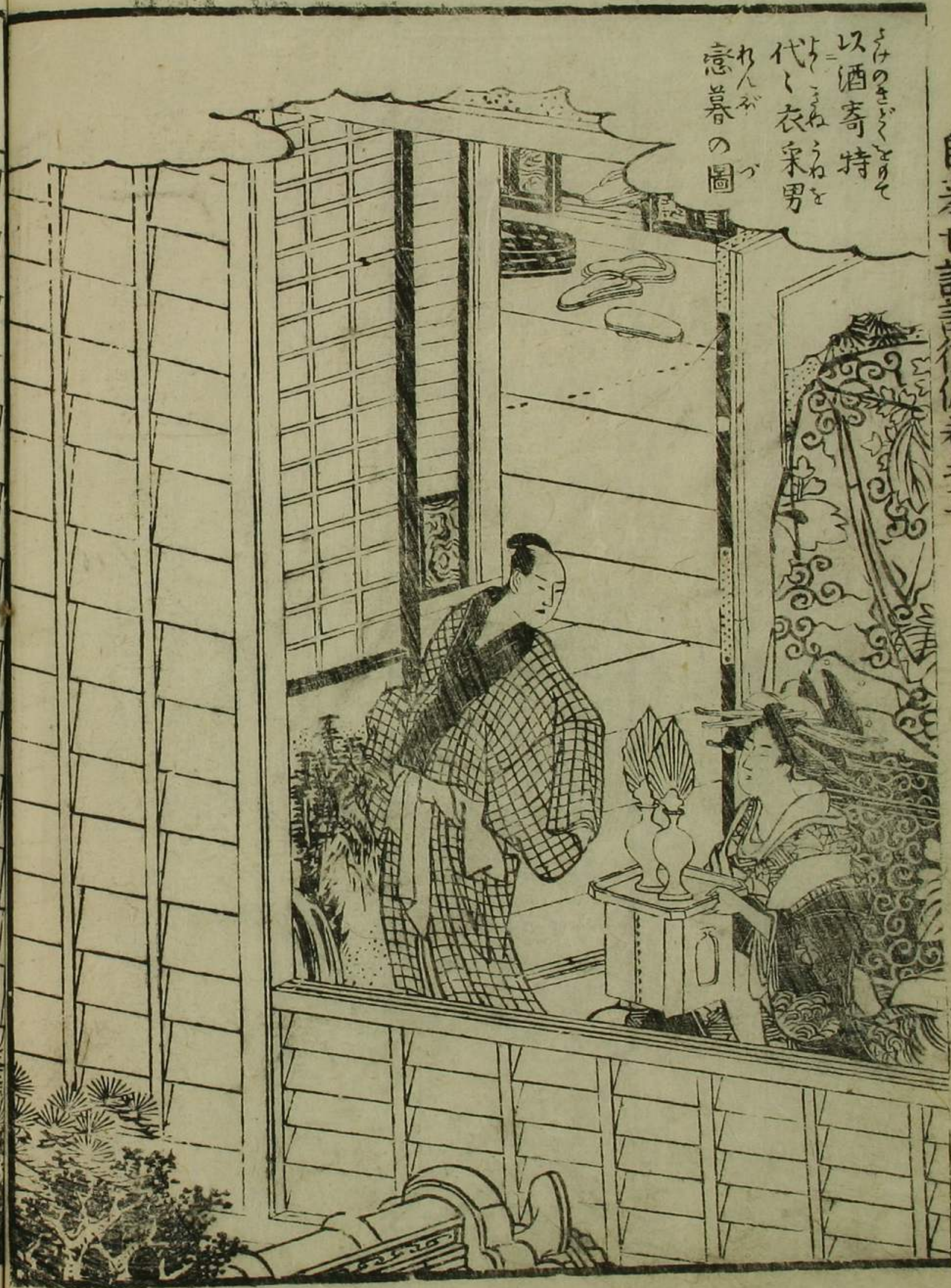
説話の後采男の以つて予その許親子の深情届と薬美良
 急ううれい念頃日身躰健く成はしとおほあれを近に他邦
 申せんとお掛さるるを詰りけしむ代衣も歡ひ清身せま油
 かく堅固不慎とありふより尤討の病も不日お平愈せしこと
 妾おおわくも何程うれしきことと夫おけき今日お君の病難
 入主快ありし壽しとて神酒と傳へ置さるるばあやも清身息災
 延命守りのく先神酒入下る君は進ませ妾も願成就のこと
 されば余りと頂とさへんと那得助の傳へ盡くれ神酒陶と下
 一采男おとあへその身もこれと香く互ひお身の健うおなりや
 を賀しなりしが不審なれうな這まぐ采男代衣して主

の因このみおく實情を盡しすこと色お延くこの意わらばり
 か此酒成さよりも兩個く流とせりも累お小意慕の情お發りし
 かい意孤傳やしくお替せん窓や鎌倉一と因へられ風流漢子
 の采男お容貌復曲輪お當時双ひるる全盛の代くごん美
 容の顔月の眉秋波の睽艶なれ兩をおひくう海棠桃李の
 粧ひお采男も今に堪がら代衣も今更おばらむと外お頭直し
 采男の眼中情と合と勤の身おも真實おありし時と面漸氣お
 采男お言あうりつと君の程なく他邦お知んと命せられと兄
 身してあはね月の勿躰なれ夏なうう清主人も兄上とを
 力お相おひらぐればこそ恩お掛すのうとお非とも神お折言ひ



自來世言行傳卷之三

十三



自來世言行傳卷之三
 以酒奇持
 代衣采男
 意暮の圖

醫師が馮心こころなく、心をこめてしつと其甲斐ありて病みの平愈
 悦ぶ間もななく、交路立し難面命君小別はすいせき跡は残り
 妾が身も何処この憂勤め半息いと涙をあらしりせと涙
 いせぶありとぬふ采男も脊を挫きとり奈何なれまうこそ
 とても今更其方を振合々々他國も出入も名残惜しこれななく
 厚き情のう人其志をばつらへ包みうめこれ我心腐も推量あり
 ば二世うけく女夫となりて終んやと手紙惹きおれば代ごぬ
 主人の意慕の其う人女夫ふりうぐとふ勿辨あり云々兼
 不吾身をも不便とおぼしめせめくは伊藤同の伽ありと
 勤く流もらうら忘息采男小心死と抱き跟實情よく結ひは

泉の乱これ穂おせ薄尾花や意風不縛日一巻あり中
 放りかたれた風情あく這より遂小兩個の偕老同穴の契あり
 をこそ結ひしれ

於上総國破魔之助の妹の意病而死併汀亡靈
 娼妓代衣喰殺条

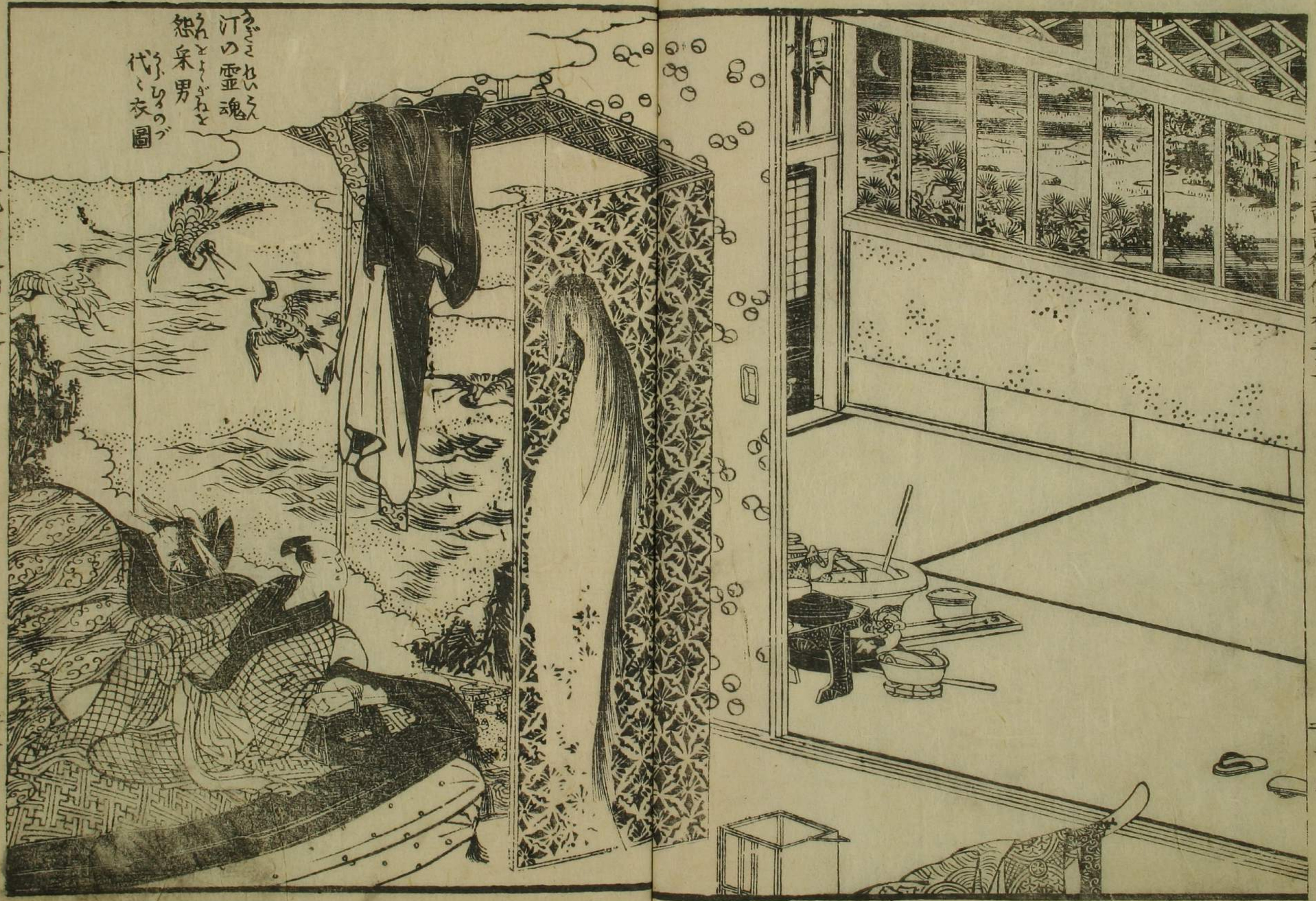
安房國鏡浦ふおろく侶吉郎仇討の期附添ありし自來也
 の小唄喉天眼礮兵衛と其場より道世一上総國百首の辺
 小庵室を結び鹿野苑軍太夫の後吊ひ行ひ清くあり
 けれが自來也の前ふ之浦の沖あく汀を擣お做しはくも茲
 石堂家の近臣万里野破廣之助の妹と同一色ふ事寄せ

捕へて石堂家へ入らむの念願あれば人質のころは停置
 ちども吾傍身こそあてり色小沈むの比判も何と天眼坊と
 憑り暗ふ上総の國へ送り遣し置ぬとぞ然るふ汀へ捉まこと
 一問お押してれ逃出をうやうも形く當且夕吾川采男
 の更のこ想ひ續け意慕ひ付けしが遂に病つとなりて今へ
 のそやぞ数るくくも天眼坊も意気けし復侶士も夫の
 所ふまゝありありぬは俱く力と跟醫療もと尽きとく人も
 驗あり憐むし汀へ采男と慕ひ意病く終ふ空しく成れど
 も侶吉天眼坊もあれと催し跡より斤付此更自來也の方へ
 申し遣はせし自來也もこれを歎と僅小女一個人質とあひ

停めおれ殺せし一平生の誤不便のゆゑを做せしとて追薄料ホ
 許多天眼坊くく後親ふ吊りせりなり諸も采男
 代に夜に深く馴染ふ征ひ他けれ眼もほき兄とつれを
 詐あり實ハ夫ありあやんなどせしありりるが一夜
 復代に衣采男を圍中あ忍び入る枕なぐり居りし
 且満の比に采男不圖枕邊を看るふ絶てに経し汀の顔
 色青く髪揺れし瘦果く容象あり恨りげ采男を
 看詰ありし其方ハ汀少ふおばけやと騒るこ切起んせ
 せし處小象ハ其し消へ失て影もふへど此時代衣も目
 見え何しひもどと回し采男ハ畜養ふ襲りしとの云

紛らゝその夜と何更もあゝ別とあけれあうふやと明夜へ
代く衣一個ありり。大座へ汀の幽霊昨夜の容象より立影
け且代衣ハ大座に驚き這者誰人ふけふや。子守れは
悲し声音あゝいつくし身不知や毒とそ石堂家の臣
万里野破魔之助といひおりの妹汀とて采男どのと二世の誓言
を固め比翼の契り瓜結びし頃之浦の沖あゝ賊小提
其期うノ采男どのとあゝ別とをばし毒と上総の團小掬と
成りありはれが憲一床と朝暮吾川どの瓜暮ひすつとせ
遂ふ病ふとなつて此不どおはつり竹が男どのの難面
今ハ疾吾等の更ハ見外あゝ其許と契り瓜結び然し

さうなる采男どのよ斯うすけのありしやあゝ其方ハ是非
もなす此入想ひとすり玉ひ平亡後も吊く終へ復斯もの
ゆれその上ふも兩個の中も絶げれハ今より后ハ其許ハ恨と
暗しヤさんと必く此后ハ采男どのと契りを結びおのれあま
這事憑とすいせん容象を顕しけり始と聞ける兩個
の中身れ毛とちり代衣ハ懼しなう汀ハむひは兩個
中ハおれ更ありしと夢聊もあゝおれが死あひし
と身おつとされ何と悲しれを承りおれしなりさまが
毒のヤと一通り聞け終る賤しれ動の身あをけり人と
り主人の采男さま不思議の縁お繋れ我家へ到りまひ



江の霊魂
怨采男
代衣圖

目録 世説 後編 卷之三

十七

目録 世説 後編 卷之三

ちより此身を贖ひ病めを救ひすのせしむ何しも解
 初しより此人より針を男の持しよと夜毎毎日絶間な死世界の
 客へ空言も一個不盡と勤の實今更那人死振金も何賜ふ
 存人修ん身は世もこの世と去ふべせあり浮世不あるうち
 采男さへを喜ぶあり末末は身身の夫と做し此と因訳あり
 うは追薦供養急り形我く吊ひすのせん手と合はせれば江の
 亡靈うのひうと不はよ今もいごとく采男とのをこそ妻に添せん
 こと知しこれ計り叶ふまどか云妻の言致客ひと因入
 ろく詮さるる其方の命を取らんぞと半貞怒りてくわ見ぶ
 将氣の胸に代衣も今ハ怖さも打忘れ妻がりせ入沢とせ入
 けはは身こそ難面は此上の妻が一命召くとも采男さへま
 と替かじ恨が怨も多し怒りいづく中絶人と言を發てが
 江の坐雲面色忽ち凄しく悪れた女の返答うまよく汝ふら
 恨今小想ひ初せんぞと確と照と其れ小象の失せし
 へくげ代衣悪寒才の毛立とれより發熱夥しく夢中よ
 かり口走り狂ひ巡るば采男も此とてげよりも大に驚こ走せ
 有り容態を看やあれが代衣采男を八打と照跟怨や
 采男どの江あはれやや妻ハ身孤悲慕の上総のあふ
 空しく形りしうと意一床に一念のう小判と動靜を觀と
 惜や予を捨置代衣の色香ふ迷ひ二世の約速姫

采男どの江あはれやや妻ハ身孤悲慕の上総のあふ
 空しく形りしうと意一床に一念のう小判と動靜を觀と
 惜や予を捨置代衣の色香ふ迷ひ二世の約速姫

代衣ふささしく想ひ停まると云同これどもうけひつと今ハ
の怨より此代衣の恨やう憎さも悪し取殺し予が念ハ
暗さんと想ふふより斯腦しけりあり山身の流石寂愛く取殺
さぐら存念なり今より公孤改めし再ひ帰参做し玉く此女
今宵の中毒一命と取畢ぬと代衣の面色薄くは走る
ぞ采男ハ何と返答も人々の手前とけり面目失ひ延良く既ハ
其夜ふまりし代衣半鼻睡うとて侍りしゆ急看病の人
も權し此間ハ休息せんと衆皆次へ立ちけり跡雜妓一個傍に半
睡夢とちふ看病做しありけり處ハ方とて寐入る代衣
の枕のりしとある懼しや汀の容象幻のごとく立ちあがり髪と

荊蕀ふ揺乱し眼逆釣色青ざり瘦れ果て顔みく代衣
の外にたれよふ事よと云へけれが喉ハ喰眼呼と苔しむを起し
立ちて常一口は喰殺し今そ怨と暗しねと口のりも血不流
く顔揮擡し呵し笑ひ顔色ふるより傍の雜妓ハ跟
呼と叫び其後ハ魂飛ぶ氣絶る此の音ハ何古又人
走寄観てあれハ這者如何代衣ハ血ふすれ離妓諸とこ
息絶るありぬ故氣跟よサと噪動し命泡すし呼
と代衣ハ疾言切し更ハ答へあざりし離妓ハ漸ハ
を跟ありし動靜ハ語もあぞ衆皆奇異の想ひをば采男ハ此
ハ走まり今ハ何と包人と二個の女子契りしハ逸く小説話

泪と流せし此上と兩個の後懇み吊みらと亡者のくみ竹人
 主の勧めふ泣くも代衣の亡骸より解此又と浦へい
 贈る吾川采男も發心なり今より一生女犯を慎み月へ
 功を立後浮世を遁し黒漆の出家とありと兩個の建
 供養高しと茲より此所を立出と暗み鎌倉のくみぞ
 趣きし

自來世説話後編卷之三 畢

月夜
 咲花

